『源氏物語』諸写本に見られる助動詞ムズ

（『言語の研究』五号　二〇一九年七月）

竹部歩美

はじめに

本稿は、『源氏物語』（以下、『物語』）の諸写本における助動詞ムズの出現量を再調査し、併せて、その口頭語性と俗語性とについて考察しようとするものである。

推量の助動詞ムズは、『源氏物語大成校異篇』本文（以下、『大成』）には次の3例がある。

○（右近）「いかでか世に侍らんずらん。」〈夕顔、一四〇⑪〉

○（近江君）「いつか女御殿には参りはべらんずる。」〈常夏、八四六③〉

○（浮舟の心内）「さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだにいつか見んずる。」〈手習、二〇二五⑨〉

ところが、『物語』の諸写本には、右の3例以外にもムズが現れるところがある。『物語』のムズについて、吉田（一九六二）は『大成』に異同として17例あるとしたものの、その17例が『物語』の何処の異同を指すのかは示していない。『物語』の諸写本に見られるムズの所在についての調査は渡辺（一九七三）・五島（一九八〇）があるものの、これ以降行われていない。また、ムズは中古（平安時代）の口頭語であったとされ、吉田（一九六二）においても『物語』の17例のムズは会話文と心内文に現れるとされており、右に挙げた『大成』の3例はそれに合致しているが、諸写本に見られるムズは、会話文・心内文以外にも現れる。さらに、ムズは俗語であったとされているものの、諸写本に見られるムズも俗語であると言い得るかについては十分な考察がなされていない。たしかに、右に挙げた3例は、発話者に貴族的な教養の欠落や社会的地位の低さなどが認められる点から、ムズが俗語であると言えるようにも思われる。しかし、諸写本に現れるムズにおける会話文の発話者は帝や源氏の場合もある。

そこで、本稿は、『物語』の諸写本に見られる助動詞ムズについて再調査し、『物語』のどの箇所にムズが異同として現れるのかを報告する。併せて、口頭語（話しことば）の性質が見出され、その発話者や発話内容に卑俗的な性質が見出されるところにムズへの異同が見られることについて報告する。

用例は『大成』本文を私に表記を改めて示す。写本の用例は可能な限り原本にあたって用例を確認し、見せ消ち等について原本の元の状態がわかるようにしつつ現行の漢字仮名交じりで示す。原本にあたっての確認のとれていないものについてはその旨を示す。

一．先行研究と本稿の課題

ムズは、推量の助動詞ム＋格助詞ト＋サ変動詞スから成るムトスから転じて中古中期に成ったとされるものである（ムズとムトスの活用形については第三節で述べる）。ただし、ムトスからムズは成り得ないともされ、その成立については諸説ある。[1]

『物語』の諸写本に見られるムズについては、これまで、『大成』に示された異同に拠る調査がなされている。吉田（一九六二）は「異本における「むず」を拾い集めてみても僅か十七例にすぎない」としたが、それがどの箇所のものであるかを示してはいない。渡辺（一九七三）は、『大成』にムトスとある29箇所とそれ以外の6箇所にムズへの異同があるとして、『大成』で異同のある箇所を示し、同時に、「源氏古写本では、青表紙本一七、河内本三〇、別本四三」あるとしている。[2] 五島（一九八〇）は、『大成』がムトスとするところに「ムズの異文を有する例は、二八例」あるとし、また、ムトスではないところにもムズへの異同が「若干ある」としている。

吉田（一九六二）は、ムズはムトスから転じたものであるとして、ムトスとムズの用例数と文章中での出現位置（地の文・会話文・心内文）について調査し、地の文にムズが現れるのは『今昔物語集』（十二世紀頃）からであり、これ以前のムズは会話文と心内文に現れる傾向が顕著で地の文には多くは見られないこと、中世になるとムズの用例数が増加し、また、地の文の用例数も増加することを示した。五島（一九八〇）も、ムズへの異同は地の文にはないと報告している。なお、中世ではムズは文語として用いられ、ウズが口語として用いられるとされる（『時代別国語大辞典室町時代編』三省堂）。ムズが話題となるとき、『枕草子』一九五段[3]の「何事を言ひても、「そのことさせんとす」「いはんとす」「なにとせんとす」といふと文字を失ひて、ただ「いはむずる」「里へいでんずる」などいへば、やがていとわろし。まいて文にかいてはいふべきにもあらず。」の記述が採りあげられるが、この記述は、中古ではムズは話しことばであって、書きことばとしては不適切な俗語であったという当時の言語意識を示すとされる（山口・秋本編二〇〇一）。[4] ムズの俗語性に関して、五島（一九八〇）は、『物語』で異同としてムズが現れるところに「性差・身分差などの偏り」はないとし、偏りがないのは書写者によって「ムトスがムズにかえられた」ためであるとしながら、個々の写本におけるムズの出現量が少ないことを根拠として、写本が書写された中世以降もムズは「口語・俗語としての色合いが強く」、書写者たちは「それを好ましく思わなかった」のではないかと推測している。なお、中世のムズ（ウズ）の俗語性について言及するものは管見の限りではないようである。

ムズの語義について、此島（一九七三）や山口・秋本編[5]（二〇〇一）ではムズはムとほぼ同義だがムに比して強調の意が強いとされており、そのためか、「意味の上では「べし」との類似性を持つ」（『日本国語大辞典第二版』小学館）とも言われる。松村編[6]（一九七一）も、また、ムズはムとほぼ同義であるとし、ムズの「用法はほとんど推量の用法に含まれる」という。関（一九九〇）は、成立当初頃のムズは意志を表すとし、ムズの原形であるムトスはその人物の意志に基づいて具体的な動作を行うことを表すという。そして、ムズとムトスは平安時代後期に同義に近付くという。鎌倉（一九九三）は、ムズは活用形によって意味が異なり、連体形ムズルは推量の助動詞

であるが、終止形ムズには意志や推量の意を確信をもって念押しするものであるという。そしてムトスはムに上接する語で示される事態を行う意であるとする。

ムズが口頭語であるという観点、あるいは、ムズとムトスや推量・推定の助動詞との意味の相違の観点、写本間の異同の多少などの観点から、五島（一九八〇）は『物語』写本に見られるムズについて、本文中にムズとあることの良し悪しを述べている。

これらのことから、ムズに関しては、まず、次の事柄についての調査を改めて行う必要があると考える。

第一に、諸写本に異同としてムズが現れる箇所についての再調査が必要である。吉田（一九六二）、渡辺（一九七三）、五島（一九八〇）の調査は『大成』の異同に拠るものであったが、『源氏物語別本集成』（以下、『別本集成』）や『源氏物語別本集成続』（以下『集成続』）等に拠って調査すると、これまで指摘されていなかった箇所にもムズへの異同がある箇所のあることが判るためである。また、ムズへの異同はムトスに対してのみならずムトス以外のところにも見られるためである

第二に、第一の再調査に伴って、文章中での出現位置についての再調査が必要となる。吉田（一九六二）が『物語』のムズは会話文と心内文に現れるとしたが、異同として見られるムズは、これ以外のところにも現れるからである。

第三に、ムズの口頭語性と俗語性に関して再考する必要がある。これまでの考察はムやベシやムトスとの意味の相違や推量の意味の強弱の観点から考えられたり、当該箇所にムズが現れることをめぐって本文批判がなされたりはしているものの、口頭語・俗語の観点からは十分な考察はなされてはいないからである。先述のように『物語』の諸写本に見られるムズは会話文と心内文以外にも現れるので、ムズの口頭語性について再考する必要がある。また、ムズが現れる会話文や心内文の発話者は、社会的地位の高い者である場合も低い者である場合もあり、「性差・身分差などの偏り」はないとの五島（一九八〇）の指摘をうけると、ムズの俗語性は発話者の位相以外の点に見出されるのではないかと推測されるのである。

本稿は、第一の課題と、それに伴って生じる第二・第三の課題の、三点を明らかにすることを目的として考察を行う。[7]

二．諸写本に見られるムズの所在

まず、『物語』の諸写本の中でのムズの出現量とその所在箇所について述べる。『大成』の異同、『別本集成』、『集成続』、加藤（二〇〇一）、田島（一九九四）、渡辺（一九七三）と、吉沢[8]（一九五二）に拠る調査、および、これにいくつかの写本[9]の調査によって、その結果をまとめたのが、本稿末尾に付す【表1】である。

【表1】の横軸に連番を付す（以後、ムズの用例を挙げる際はこの連番を○で括ったものを用例番号として示す）。連番の数字のみを（　）で括ってあるのが、本稿の再調査で新たに写本中にムズの用例のあることが明らかとなったところである。横軸にある「大成本文」とは、諸写本にムズが現れるところに見られる『大成』の文言である。

【表1】の縦軸には、本稿が私に付した写本の仮の略称を五十音順に配列してある。[10]

表中には、諸写本中に異同としてムズが見られるところに写本の系統の略称（青＝青表紙本・河＝河内本・別＝別本）を付してある。[11] 古註釈書である『湖月抄』には「〇」のみを付した。表中の「－」は欠巻であることを示している。[12]

表中の空欄は、その写本の当該箇所にはムズが現れていないことを示している。例えば、用例⑧は、『大成』にムトス（おひやらむとすらむとそきわつらひ）とあり、諸写本の多くにも当該箇所ムトスとあり、陽明本はム（おひやらんとそきわつらひ）とあるが、当該箇所をムズとするのは御物本のみである、ということを示している。用例②は『大成』にベシ（はふれぬべき）とあり、諸写本の多くにも当該箇所にはベシとあり、陽明本にはムトス（はふれなんとす）とあるところだが、七毫源氏・高松宮家本・中京大河内本・天理河内本・尾州家本・蓬左文庫実時本・鳳来寺本の七本がムズ（例・はふれなむする〈高松宮家本〉）としているということを示している。用例㉑は、『大成』にムズ（まいり侍らんすると）とあり、河内本の諸写本にはベカラム（まいり侍へからんと）とあり、保坂本にはム（まいり侍らんと）とあるなかで、ムズとする青表紙本・別本の諸写本がある、ということを意味している。

表中の「と補」とは、本文にムズとあるところの左右に「と」が補われていることを示している。[13] 例えば、次に挙げる大島本（用例⑦）では、トが右側に補われている。表中の「とイ」とは、本文にムズとあるところの左右に「とイ」の記述があるものである。次の三条西家（日大）本（用例㊷）では、次に示すように本文の右側に「とイ」とあって、当該箇所をムズではなくムトスとする異本のある旨が示されている。「と見消」とは、次に挙げる蓬左文庫実時本（用例④）のように、本文中のムトスのトを見せ消ちとし、本文をムズとしているということを示している。

〇いかにの給はむ。すらむと〈大島本、末摘花、三七ウ⑧〉
〇いつかはみん。すると思ふ
〈三条西家（日大）本、手習、五四ウ⑤〉
〇とをくゝたりなんとするを[14]
〈蓬左文庫・北条実時奥書本、夕顔、四二ウ⑦〉

さて、まず、ムズは、すでに築島（一九七四）にも指摘があるように、平安時代末期に成ったと目されている国宝『源氏物語絵巻』の詞書には用例がない。よって、ムズは、鎌倉期以降の諸写本に、異同として現れるということが再確認される。

次に、【表1】から以下のことを指摘することができる。

第一に、一つの箇所をすべての写本がムズとする例は皆無であることである。冒頭に挙げた『大成』に見られる3例のムズ（用例③・㉑・㊷）について、築島（一九七四）は、その3例にはいずれにも異同があるとしたが、この3例のみならず、すべてのムズの用例には異同があるのである。

第二に、ムズの現れる写本は、渡辺（一九七三）の指摘するように、青表紙本系の写本よりも、河内本系・別本系のものに出現量が多いことである。青表紙本系に38、河内本系に62、別本系に65見られる。ただし、吉田（一九六二）・渡辺（一九七三）・五島（一九八〇）が『大成』に拠る調査であったのに対し、本稿は『大成』のほか、河内本（加藤二〇〇一に拠る）と別本（『別本集成』・『集成続』に拠る）の調査を付け加えたのであるから、河内本と別本の用例が多くなるのは当然ではある。

第三に、【表1】で連番に（　）を付したものがあるように、吉田（一九六二）・渡辺（一九七三）・五島（一九八〇）が指摘したところ以外にも異同があることである。【表1】のとおり、『物語』の53箇所にムズへの異同がある。なお、その53箇所の、『大成』本文のありようは、ムズ3例、ムトス35例、ムズ・ムトス以外15例である。

第四に、ムズへの異同は会話文・心内文にも見られることである。吉田（一九六二）は会話文・心内文にのみムズが見られるとしたが、実際には、会話文・心内文のほか、地の文・手紙文・草子地・和歌にもムズへの異同は見られる。例えば次の用例④は地の文に見られるものであり、用例⑩は手紙文に見られるものである。

④（空蟬が夫とともに）遠く（伊予に）下りなどするを、
〈夕顔、一四一⑪〉

・とをく下なんするを〈国冬本（未確認）〉
・とをくくたりなむするをおもふも〈高松宮家本、五三オ③〉
・とをくくたりなんするを
〈中京大河内本、一―二四七右②〉
・とをくくたりなんするを〈天理河内本（未確認）〉
・とをくたりなんとするを[15]〈尾州家河内本、四四ウ⑦〉
・とをくゝたりなんとするを[16]
〈蓬左文庫北条実時奥書本、四二ウ⑦〉
・とを。くたりなむするを〈穂久邇文庫本、五九ウ⑤〉

⑩宮の御前に御消息聞こえたまへり。（源氏）「院におぼつかながりのたまはするにより、今日なむ参りはべる。」
〈葵、三一四⑨〉

・ゐんにおほつかなかりたまはんするより
〈御物本、四九オ⑩〉

三．ムズへの異同がある箇所

前節に見たように、異同としてのムズは、『大成』にムトスとあるところに多数――異同の見られる53箇所中35箇所に現れる。一般的にはムズはムトスから生じたとされる一方で、ムトスからムズは生じ得ないという説もあるにもかかわらず、である。

下の【表2】は、『大成』の53箇所に異同として見られるムズの活用形を示したものである。『大成』にはムトスが104例あるが、このうちの、ムズへの異同のない69例の活用形についても【表2】に併せて示した。

【表2】のとおり、諸写本に見られるムズの活用形は、終止形（ムズ）と連体形（ムズル）の2形である。また、異同としてのムズは、ムトスが終止形（ムトス）の場合は終止形（ムズ）、連体形（ムトスル）のときは連体形（ムズル）で現れ、活用形の異同はない。ムズへの異同があるムトス35例に注目すると、ムズへの異同が見られるのは、ムトにス（サ行ウ段音）が続く場合にのみであり、ムトにシ（サ行イ段音）が続く場合には異同は見られないことも指摘

【表2】活用形ごとの用例数

	ムトス（104例）		ムトス以外	『大成』にムズとある3例
	ムズへの異同			
	なし69例	あり35例	あり15例	
終止形	26	20	3	1
連体形	37	15	12	2
已然形	6	0	0	0

できる。ただし、已然形ムトスレの用例はあるものの異同としての已然形ムズレは見られない。[17] なお、ある一つの箇所に複数の写本がムズとする場合があるが、そのときに、写本ごとで活用形が異なる例はない。例えば、前節に挙げた用例④において、諸写本のムズの活用形がすべて連体形ムズルであるようにである。

ここで、ムトス以外のところにムズが異同として現れる15例について、その箇所の『大成』本文の特徴について整理しておく。その15例の特徴は、次の4つに整理できる。第一に、『大成』にはムトスとはないものの、諸写本には概ね一致してムトスとある用例があるというものである。[18] 第二に、『大成』にはムトスではなく推量・推定の助動詞（ム・ベシ）があるというものである。第三に、『大成』において係り結びの結びの省略が起きているところにムズへの異同があり、その省略された結びの語には推量の助動詞を補って考えられるというものである。第四は、この三点のいずれにも該当しないものである。

まず、第一の、『大成』にはムトスとなく、諸写本に概ね一致してムトスとある例（2例）についてである。『大成』以外の写本では、次の用例④・⑬の当該箇所を、ムトスとするのが大勢である。『大成』の異同に拠れば、用例④は底本である大島本以外のすべて（青表紙本〔横山・榊原・肖柏・三条西・池田〕・河内本〔七毫・高松宮・尾州・大島河内・鳳来寺〕・別本〔陽明〕）に「くだりなむ（ん）とす」とあり、[19] 用例⑬も大島本以外のすべて（青表紙本〔横山・池田・飯島・肖柏・三条西〕・河内本〔七毫・高松宮・尾州・大島河内〕・別本〔陽明〕）に「たいめんたまはらむ（ん）とすらん」とある。よって、用例④・⑬は、ムトスに対するムズへの異同として扱える可能性が高い。諸写本がテキストとしたものにムトスとあった可能性があるからである。この第一の点からも、諸写本に見られるムズへの異同は、ムトスに対して見られる傾向が顕著であると言える。

④（空蟬が夫とともに）遠く（伊予に）下りなどするを、さすがに心細ければ、（空蟬）「（源氏は私を）思し忘れぬるか。」と、…〈夕顔、一四一⑫〉

・とを。くたりなむするを〈穂久邇文庫本、五九ウ⑤〉

⑬…（源氏が頭中将を）見送りたまふけしき、いとなかなかなり。（頭中将）「いつまた対面は。」と申したまふに、…〈須磨、四三四⑤〉

・又たいめん給はんすらんさりともかくてやはと申給〈御物本、五八オ④〉

次に、第二の、推量・推定の助動詞のあること（9例）についてである。これらは、次の用例㊱・②ように、助動詞ム（7例）・ベシ（2例）が現れるところにムズへの異同が見られる。先行研究では、ムズと助動詞ム、ムズと助動詞ベシの近似性が説かれることがあるが（第一節参照）、この9例に異同が見られるのはそれに因るものかと推測される。

㊱人召して、（蕙）「（私は）北の院（＝匂宮邸）に参らむに、ことことしからぬ車さし出でさせよ。」とのたまへば、〈宿木、一七一三⑥〉

・北の院にまいらんするにこと〳〵しからぬくるまさし出させよ〈阿里莫本（未確認）〉

②（源氏）「かかる道の空にてはふれぬべきにやあらん、さらにえ行き着くまじき心地なんする。」とのたまふに、

・かゝるみちのそらにてはふれなんするにやあらん
〈夕顔、一三五④〉
〈中京大河内本、一一二三四左⑥〉

次に、第三の、結びの結びの省略（1例）についてである。これは、次の用例㉖の中に《　》で補足したように、省略された結びの語に推量の助動詞を補って解釈することができる。[20] よって、用例㉖は先の第二の点に準ずるものとして扱い得る。

㉖まことに、（承香殿女御は女三宮を）心とどめて思ひ後見むとまではおぼさずもや《あらむ》とぞ推し量らるるかし。
〈若菜上、一〇二七⑩〉

・又まことにうしろみんなとは心とゝめすや物し給はんすらんなと〈中京大河内本、七―二九五左⑦〉

最後に、第四の、先の三点に該当しないもの（3例）である。これについては次のように考えられる。次の用例⑩は、この直前に「（源氏が）院へ参りたまふ」とある。用例⑩は、源氏が自邸から参内しようとするところであり、その際に大宮へ送った手紙である。その消息文の内容を、「院が言っている」という実現した事態としてではなく、「言っているようだ」と写本の書写者は解釈し、そこに推量等の意を見出しているのではないかと推測される。用例⑳は「（好き者どもの）気を揉ませる」と解釈されるところであるが、視点を変えると「（好き者どもが）気を揉む」と見ることができる。また、「好き者どもの心をつくさする」という事態は発話時では未実現であるから、それを示すために写本の書写者は推量の助動詞を要すると考えたのではないかと推測される。用例㉗も用例⑳と同様である。用例㉗は明石入道が隠遁を決心した場面であり、明石の上が、父に会えなくなってしまうのではないかと、発話時よりも先の未来のことを述べていると解釈することができるものである。このように考えると、この3例も、また、先の第二の点に類するものとして扱うことができよう。

⑩宮の御前に御消息聞こえたまへり。（源氏）「院におぼつかなかりのたまはするにより、今日なむ参りはべる。」
〈葵、三一四⑨〉

・ゐんにおぼつかなかりたまはんするより〈御物本、四九オ⑩〉

⑳（源氏）「（玉鬘の婿になろうという）好き者どもの心尽くさするくさはひにて、（私は玉鬘を）いといたうもてなさむ。」など語らひたまへば、〈玉鬘、七四四⑨〉

・すきものともの心つくさんするくさはひにて
〈保坂本、五〇オ⑧〉

㉗（明石の上）「（父に）あひ見で過ぎはてぬるにこそは。」と見たまふに、いみじく言ふかひなし。〈若菜上、一〇九八②〉

・あひ見てすきはてなんするにこそはと見給にも
〈中京大河内本、七―三七三右⑦〉

このように、『大成』にムトスとないところにも異同としてムズが見られることがあるが、第一の点はムトスに対して現れるムズへの異同として扱うことができ、第二～四の点は助動詞ム・ベシに対して現れる異同として扱うことができる。このことから、ムズは、ムトスに対して異同として見られるか、推量・推定の助動詞のある、または、それがあると想定することのできるところに対して異同として見られるかの二つに概ね整理することができると言えよう。

四．ムズの文章中での出現位置

次に、ムズの文章中での出現位置について整理する。

ムズが、『大成』にムトスとあるところ対して異同として見られる箇所（以下、これをAとする）と、『大成』にムトス・ムズとあるところ以外に対して見られる箇所（以下、これをBとする）と、『大成』にムズとあるところ（以下、これをCとする）とに分け、それぞれが、地の文・会話文・心内文・草子地・手紙文・和歌のいずれに出現するかをまとめたのが【表3】である。また、ムズがムトスに対して異同として現れる傾向が顕著であることから、異同のないムトスについても併せて【表3】に整理する。

【表3】からまず明らかになるのは、異同のないムトスとA・B・Cとを比較した際の顕著な相違が、地の文での出現数の多少だということである。異同のないムトスは地の文に見られる用例が最多であるのに対し、A・B・Cではそれがわずかである。殊に、異同のないムトスとAとを比較したとき、Aは地の文には用例がないという点で明確に対立する。たしかに、Bの地の文の3例のうち1例は、前節に見た、ムトスに準ずるもの（『大成』はムトスではないが諸写本にはムトスとある例）である。しかし、その用例は、先掲の用例④の1例のみである。また、A・B・Cにおいて地の文への出現は3例にとどまることから、地の文にはムズは現れにくいという傾向は顕著であると言える。[21]

【表3】文章中での出現位置

ムトスで異同なし（69例）					
地	会	心	草	文	歌
37	20	12	0	0	0
A ムトスで異同あり（35例）					
地	会	心	草	文	歌
0	16	17	1	0	1
B ムトス・ムズ以外で異同あり（15例）					
地	会	心	草	文	歌
3	8	1	1	2	0
C 『大成』にムズとある（3例）					
地	会	心	草	文	歌
0	2	1	0	0	0

これに対し、ムズは会話文と心内文に用例が多くあり、その傾向はA・B・Cいずれにおいても顕著である。

ところで、ムズへの異同は、草子地・手紙文・和歌にも見られるが、これについては次のように考えることができる。

まず、草子地は、『物語』の書き手（語り手）[22]の心情の現れであることから、会話文・心内文と性質は同等である。

次に、森野（一九五七）の言うように「会話文や消息部はしばしばその言語主体の性格を如実に浮彫する」ものであるという点から、手紙文も会話文・心内文と性質は同等であると言える。

最後に、和歌に現れるムズであるが、実はこの和歌は、口頭でやりとりされたものである。用例⑥は、若紫の祖母である尼宮が若紫の将来を不安視した和歌を詠み、それに応じて女房が次の和歌を口頭で詠んだところである。このことから、陽明本の書写者はここに会話文としての性質を見出したのではないかと推測される。ただし、和歌の一部がムズとなった場合、和歌としては音節数が不足するので、特殊な例であることは言うまでもない。

⑥（若紫の祖母尼）「―和歌―」。また居たる大人、「げに。」とうち泣きて、（女房の和歌）「初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ。」と聞こゆるほどに、

〈若紫、一五八③〉

・はつくさのをひゆくすゑもしらぬまにいかてか露のきえんす
らんなといふ程に〈陽明本、九オ⑧〉

以上のことから、異同としてのムズは、地の文以外の、会話文や心内文に集中して（53例中の50例）見られることを、事実として指摘することができる。『物語』は、「言文一致」（浅川・竹部二〇一四）であり、地の文と会話文との間に大差はないとされるのは周知のことではある。しかし、その巨大な会話文に内包される特定の部分、すなわち、登場人物が発することばとして、いわゆる地の文とは区別することのできる部分に、ムズへの異同は集中的に見られるのである。

このことから、『物語』の諸写本に見られる異同としてのムズは、その、登場人物の話しことばという範囲内で、口頭語の性質のあるところに現れる傾向が顕著であると言い得る。

五．ムズが現れる箇所の発話者と発話内容

ところで、ムズは口頭語であると言われると同時に、俗語であるとも言われている（山口・秋本編二〇〇一[23]・高山二〇一六）。

五．一．発話者の位相

ムズが俗語であるならば、ムズは社会的地位の下位者や無教養な者のみが発するのではないかと推測される。本稿の冒頭で述べたように、『大成』に見られる3例のムズの発話者（近江君・右近・浮舟）は、たしかに、そうした点がある人物であった。

しかし、ムズへの異同のみられる箇所の発話者の社会地位の上下は次に列挙するように様々であり、そこに顕著な相違は見られないのである。また、『大成』の3例のムズの発話者はいずれも女性であったが、次のように男性の場合もあるのである。

Aのムズ（35例）のうち、草子地の1例を除いた34例の発話者を、性別ごとに分け、大まかに、社会的地位の低いものから順に列挙すると次のようになる（〔　〕はその人物に関する補足説明である）が、発話者に社会地位の上下に顕著な相違を見出すことはできない。

［男性］（計21例）

小君〔浮舟の弟〕（1例）・横川僧都の弟子（1例）・明石入道（1例）・宇治の大徳（1例）・玉鬘の子息（1例）・薫（4例）・鬚黒（1例）・匂宮（3例）・源氏（5例）・冷泉帝（1例）・朱雀帝（2例）

［女性］（計13例）

女ばら〔宇治の大君と中君の女房たち〕（1例）・女房（若紫の祖母尼の女房（2例）・鬚黒邸の女房（1例）・兵部君〔玉鬘の侍女〕（1例）・右近〔宇治の中君の侍女〕（1例）・横川僧都の妹尼（2例）・若紫の祖母尼（1例）・雲居雁（1例）・浮舟（1例）・中君（2例）

Bのムズ（15例）のうち、地の文（3例）と草子地（1例）を除いた、会話文・心内文・手紙文の11例の発話者についても、同様に列挙すると、次のようになる。ここでも、発話者の貴賤に顕著な相違を見出すことはできない。

［男性］（計8例）

左近少将と浮舟の仲人の男（1例）・頭中将（2例）・薫（1例）・源氏（4例）

［女性］（計3例）

落葉宮の女房（1例）・大納言の君〔今上帝の女一宮の女房〕（1例）・明石の上（1例）

このことから、ムズが俗語であるとしても、それは、発話者の位相だけに因るものではないと言える。また、AとBの相違に因るものではないとも言える。

さらに、これは、ムズへの異同のないムトスについてもあてはまる。ムズへの異同のないムトス（69例）のうち、会話文と心内文の32例についても同様に列挙すると次のようになる。

［男性］（計11例）

太宰少弐〔玉鬘の乳母の夫〕（1例）・源氏の従者（1例）・左馬頭（2例）・椿市の僧（1例）・横川僧都（1例）・薫（1例）・頭中将（1例）・源氏（3例）

［女性］（計21例）

玉鬘の乳母（1例）・浮舟の乳母（1例）・右近〔浮舟の乳母子〕（1例）・葵上の女房（1例）・源氏の女房（1例）・左衛門〔横川僧都の妹尼の侍女〕（1例）・小少将〔落葉宮の侍女〕（1例）・横川の妹尼（1例）・末摘花の叔母（2例）・鬚黒の北の方（1例）・玉鬘（1例）・浮舟（3例）・中君（3例）・紫上（2例）・藤壺宮（1例）

このように、ムズへの異同の有無による発話者と比較しても、ムズが持つとされる俗語性と発話者の位相とのあいだにのみ関連性を見出すことはできないのである。[24]

五．二．発話者と発話内容に見出される俗語性

ところが、発話者のみならず、発話内容にも着目したとき、ムズへの異同があるところには、何らかの点において、卑俗な要素――発話者の社会的地位低さや、発話者の卑しく下品な発言や行動、発話者の低俗な心理や感情などを見出すことができるのである。

例えば、次の例は、用例Ⅰと用例㊸が女房から主人に対しての発話、用例Ⅱと用例㉙が妻から夫への発話である点で同じだが、用例Ⅰ・Ⅱにはムズへの異同がなく、用例㊸・㉙にはムズへの異同がある。

Ⅰ（女房から葵へ）「今日の物見には、大将殿をこそは、あやしき山がつさへ見たてまつらんとすなれ。」〈葵、二八六③〉

Ⅱ（鬚黒の北の方から鬚黒へ）「（鬚黒が出かけようというときに）あやにくなめる雪を、いかで分けたまはんとすらむ。夜も更けぬめりや。」と、そそのかしたまふ。

〈真木柱、九四四⑭〉

㊸（右近は）いと、あさましく、あきれて、…（右近から匂宮へ）「（浮舟の母が）『今日、御迎へに。』と侍りしを、（あなたは浮舟を）いかにせさせたまはむとする御ことにか。」

〈浮舟、一八七四⑭〉

㉙（雲居雁から夕霧へ）「めでたきさまになまめいたまへらんあたりに、ありふべき身にもあらねば、（私は）いづちもいづちも失せなむとするを、かくだにな思し出でそ。」

〈夕霧、一三六三⑬〉

用例㊸は浮舟の元から帰ろうとしない匂宮に対し、右近が「あさましくあきれ」た感情をもって発言している。用例㉙は夕霧の女性

関係をめぐる夫婦喧嘩のなかでの雲居雁から夫への罵りである。

用例㊸・㉙にはこのような、発話者の、発話時の感情や発話の内容に卑しさが見出されるのに対し、用例Ⅰ・Ⅱにはそれが見出されないのである。

五．二．一．ムズへの異同のある箇所に見られる特徴

そこで、ムズへの異同のある53例について、発話の場面や発話内容に着目すると、そこには、次のような特徴が見出される。なお、これらの特徴は単独で見られる場合もあり、複合的に見られることもある。

・発話者や動作主が未成熟で粗野であったり、社会的地位の低い者であったりする。
・発話者が話題の中で悪態をついている。
・発話者が異性関係の好ましくない事柄についてを述べている。
・発話者が非常に近しい者との別離のために心的に激しく動揺している。
・発話者が俗世に執着したり出家した者に執着したりしている。
・発話者が対者と非常に近しい間柄であるなどの理由で精神的に非常に解放されている。

具体例を挙げてみたい。

まず、次の用例㊸・㉝には、発話者に未熟さや社会的地位の低さがある。用例㊸では、小君には幼さがある。用例㉝では女房を指す「女」[25]ではなく「女ばら」とあって、一般的な女房よりも低く位置付けられている。本稿冒頭に見た『大成』の用例の〈夕顔、一四〇⑪〉（本稿の用例③）・〈常夏、八四六③〉（本稿の用例㉑）にもそうした点が見られる。用例㉘（Bの15例のうちの一つ。以下では、Bについてのみ写本の用例を併記する）や、用例⑥は発話者が女房であることから、そこに社会的地位の低さが見出されたのではないかと推測される。このように、発話者に未熟さや社会的地位の低さが見られるときに、ムズへの異同が見られる。

㊸（小君）「わざとたてまつれさせたまへるしるしに、（薫に）何事をかは聞こえさせんとすらむ。ただ一言をのたまはせよかし。」など言へば、〈夢浮橋、二〇七〇④〉

㉝女ばら（＝大君中君の女房たち）など、「あはれ、年は変はりなんとす。心細く悲しきことを、改まるべき春待ち出でてしがな。」と、心を消たず言ふもあり。〈椎本、一五七一⑨〉

㉘（落葉宮の女房たち）「『（あなた＝落葉宮が）いかに聞こえさせたまふ。』とか、（私たちは夕霧に対して）聞こえはべるべき。いと軽らかならぬ御さまにて、かく、ふりはへ、急ぎ渡らせたまへる御心ばへを、思し分かぬやうならむも、あまりにはべりぬべし。」〈夕霧、一三四一⑥〉

・いかにきこえさせ給侍らんするかろらかならぬ御さまにて〈国冬本（未確認）〉

⑥（若紫の祖母尼の女房の和歌）「初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ」と聞こゆるほどに、〈若紫、一五八③〉

また、Bには、地の文にムズへの異同の例があったが、この、地の文にムズへの異同が見られるのもこれらと理由は同様で、動作主に粗野な部分や社会的地位の低さがあるためであると考えられる。[26]用例④は空蟬が動作主であり、社会的地位の上位者とは言い難い。

用例⑨の動作主は六条御息所であり、社会的地位の上位者であるが、当該箇所付近では御息所は物の怪と化すことが記されるため、そこに粗野な一面が見出されたのではないかと推測される。

④（空蟬が夫とともに）遠く（伊予に）下りなどするを、

〈夕顔、一四一⑫〉

・とをくくたりなむするをおもふも〈高松宮本、五三オ③〉

⑨御息所は、…「今は。」とて（伊勢に）ふり離れ下りたまひなむは、「いと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんこと。」と思す。〈葵、二九二⑨〉

・いまはとてふりはなれくたり給なんすいと心ほそかりぬへく

〈御物本、一七オ④〉

次の例は、発話者が無遠慮な物言いをしたり、他者を非難したり罵ったりするものである。用例㊾は、横川僧都が正体不明の女を助けたことを僧都の弟子たちが咎めるところである。用例㉛は玉鬘の子息たちが大君の院参について意見するところであり、それは玉鬘が「苦し」と感じる口調の強さがあるとされる[27]。用例㊾と用例㉛は発話の社会的地位に大差がある。しかし、発話者の位相差とは無関係に、発話者が悪態をつくような場合には、このようにムズへの異同が見られるのである。なお、本節（二）に挙げた用例㊸（右近が匂宮を非難する）や用例㉙（夫婦喧嘩で妻が夫を罵る）も、ここに含まれるものである。

㊾弟子ども、「たいだいしきわざかな。いたうわづらひたまふ人の御あたりに、よからぬものをとり入れて、穢らひ必ず出で来なむとす。」と、もどくもあり。〈手習、一九九三⑪〉

㉛（玉鬘の息子たち）「中宮をはばかりきこえたまふとて、院の女御をばいかがしたてまつりたまはむとする。」…内侍の君、「いと苦し。」と思しぬ。〈竹河、一四八八⑧〉

また、草子地にムズへの異同が見られるもの（Aの1例と、Bの1例）についても、同様に考えることができる。草子地には、書き手の、事態に対する評価が現れる。用例⑮は、紫上の異母妹の入内について源氏が手を貸そうとはしないという事態に対し、源氏はどのように対処するつもりなのかという書き手の見解が示されている[28]。用例㉖は、政敵であった承香殿が、政敵の子女である女三宮に好意を持って接してくれることなど期待できるのかという書き手の見解が示されている。これを、書き手が事態を批判的にとらえていると解釈すると、用例⑮・㉖の草子地に見られる異同としてのムズも、また、書き手の発した悪態の中に現れていると言える。

⑮兵部卿の宮の中の君（紫上の異母姉妹）も、さやうに心ざしてかしづきたまふ、名高きを、大臣は、人よりまさりたまへとしも思さずなむありける。（この事態を）いかがしたまはむとすらむ。〈澪標、四九九⑥〉

㉖その名残にて、げに、今はわざと、「憎し。」などはなくとも、まことに、（承香殿女御は女三宮を）心とどめて思ひ後見むとまではおぼさずもやとぞ推し量らるるかし。

〈若菜上、一〇二七⑩〉

・又まことにうしろみんなとは心とゝめすや物し給はんすらんなと〈中京大河内本、七―二九五左⑦〉

次の例では、異性関係に関する事柄が話題となっている。用例㊹は匂宮が薫の想い人を奪ったために薫に顔向けできないというものである。用例⑭では朧月夜はいずれ源氏に心を向けるだろうと、帝

が朧月夜に「いやみを言」[29]うところである。用例⑱では、冷泉帝が実親の秘事に関することで苦慮している。用例㊱は、薫が匂宮の不在時に中君を尋ねようというところであることから、ここに、薫の行動の低俗さが見出されているものと考えられる。このように、異性関係をめぐって好ましくない事柄が記されるところに、ムズへの異同が見られる。本稿冒頭に見た『大成』の用例の〈手習、二〇二五⑨〉（本稿の用例㊷）もこれに該当する。

㊹（匂宮）「所せき身こそわびしけれ。軽らかなるほどの殿上人などにてしばしあらばや。いかがすべき。かう包むべき人目も、え憚りあふまじくなん。大将（＝薫）もいかに思はむとすらむ。…」とぞ、（浮舟に）のたまふ。〈浮舟、一八八〇⑪〉

⑭（朱雀帝）「わが世残り少なき心地するになむ、いといとほしう、名残なきさまにて（私が亡き後に朧月夜は）とまりたまはむとすらむ。」〈澪標、四八三⑭〉

⑱（冷泉帝）「たとひあらむにても、かやう（＝源氏と藤壺宮のよう）に忍びたらむことをば、（正史や稗史で）いかでか伝へ知るやうのあらむとする。…」など、よろづに思しける。〈薄雲、六二三⑪〉

㊱人召して、（薫）「（私は）北の院（＝匂宮邸）に参らむに、ことことしからぬ車さし出でさせよ。」とのたまへば、〈宿木、一七一三⑥〉

・北の院にまいらんするにこと〳〵しからぬくるまさし出させよ〈阿里莫本（未確認）〉

次の例には発話者の激しい心的動揺が見受けられる。用例③には主人である夕顔の死後の右近の悲しみが記されている。用例㉞には臨終間近の大君に寄り添う薫の様子が記されている。用例③と用例㉞の発話者には社会的地位に大差があるが、それとは無関係に、ムズへの異同が見られるのである。

③（右近）「か（夕顔）の御あたり去らず生ほしたてたまひしを、（私が）思ひたまへ出づれば、（私は夕顔の死後）いかでか世にはべらむずらむ。」〈夕顔、一四〇⑪〉

㉞（薫の心内）「（大君は）いかになりたまひなむとするぞ。」と、（薫）「あるべきものにもあらざめり。」と見るが、をしきことたぐひなし。〈総角、一六六〇⑤〉

次の例は、発話者の、俗世への執着や出家した者への執着が記されるところである。用例⑰は出家の身である明石入道が俗世にある孫娘を思うところであり、用例㉗は、俗世にある明石の上が隠遁する父入道を思うところである。これらの用例に見られる執着心を、望ましくないものと見ているのではないかと推測する。

⑰こと忌みすれど、誰も誰もいと忍びがたし。…（明石入道は）ゆゆしきまでかく人に違へる身をいまいましく思ひながら、（明石入道心内）「（孫の顔を）片時見たてまつらでは、（私は）いかでか過ぐさむとすらむ。」と、つつみあへず。〈松風、五八四②〉

㉗（明石の上）「（父入道を）恋し。」と思ひわたりたまふ心には、（明石の上）「あひ見で過ぎはてぬるにこそは。」と見たまふに、〈若菜上、一〇九八②〉

・あひ見てすきはてなんするにこそはと見給にも〈中京大河内本、七―三七三右⑦〉

次のように、発話者が心的に解放されている箇所にも異同が見ら

れる。用例⑦は源氏が鼻に紅をつけて若紫と戯れる場面であり、用例⑧では賀茂祭見物の用意に際して、源氏が「日ごろの憂鬱さから解放されて」いる場面[30]である。これらは、通常的なありようから逸脱した状態にあるという点において、これまでに見てきた他の例と共通する。

⑦（源氏）「さらにこそ白まね。ようなきすさびわざなりや。内裏にいかにのたまはむとすらむ。」と、いとまめやかにのたまふを〈末摘花、二三〇⑦〉

⑧（源氏）「君の御髪はわれ削がむ。」とて、「うたて、所せうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ。」〈葵、二九〇⑪〉

このように、ムズへの異同がある箇所には、発話者や動作主に社会的地位の低さや未熟さがあったり、発話の内容や話題に、一般的・日常的・常識的な状態とは異なった、卑しさや下品さやといった卑俗なありようが見出されたりするのである。

五．二．二．異同のないムトスに見られる特徴

ところで、ここでムトスに注目してみたい。ムズには、前述のように、発話者や発話内容に卑俗な点が見出されることから、そうした要素がない場合には、ムトスにはムズへの異同がないことが期待され、そうした要素が見出される場合には、ムトスには必ずムズへの異同があることが期待される。

事実、本節．二．に挙げた用例Ⅰ・Ⅱのように、異同のないムトスに卑俗的な要素が見出されないものが確かにある。

用例Ⅰの女房から葵への発話の内容は源氏を褒めるものであり、用例Ⅱは妻が夫に外出を促すものであって、悪意などの激しい心的な動揺は見られない。

Ⅰ（女房）「今日の物見には、大将殿をこそは、あやしき山がつさへ見たてまつらんとすなれ。」〈葵、二八六③〉

Ⅱ（鬚黒の北の方）「（鬚黒が出かけようというときに）あやにくなめる雪を、いかで分けたまはんとすらむ。夜も更けぬめりや。」とそそのかしたまふ。〈真木柱、九四四⑭〉

次の〈賢木〉の例は、藤壺宮が自身の出家について帝に言い聞かせるところである。〈手習〉の例は横川僧都は弟子たちをとがめてはいるものの、説法であって悪意に基づくものではない。〈玉鬘〉の例では、乳母が大夫の監に対してよろしくない感情を抱いていることを『物語』の読者は知ってはいるが、ここは、乳母は大夫の監に対して慎重に発言しているところである。

○（藤壺）「それは、老いてはべれば醜きぞ。さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむこともいとど久しかるべきぞ。」〈賢木、三五五⑧〉

○（僧都）「池に泳ぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて死なむとするを見て助けざらむは、いと悲しかるべし。…」とのたまひて、〈手習、一九九三⑤〉

○（玉鬘の乳母）「いかで。かかること（大夫の監の思いを）を聞かで、（玉鬘は）尼になりなむとす。」と（使者を通じて）言はせたりければ、〈玉鬘、七二四①〉

このように、話題に登場する人物や内容に対する悪意や心的動揺が特段見受けられない場合にはムズへの異同がないとは言える。

しかし、その一方で、ムズへの異同のないムトスに、卑俗的な要

素が見出されることがある。つまり、発話者や話題や発話内容に卑俗性がある場合には必ずムズへの異同があるとは限らないのである。

例えば、用例㊿とその次の〈手習〉の例では、横川僧都の妹尼の、浮舟との別離に関する心的な動揺が記される点では同じだが、用例㊿には異同があり、〈手習〉の例には異同がない。同様に、用例52とその次の〈浮舟〉の例は、浮舟が薫を思っている点では同じだが、用例52には異同があり、〈浮舟〉の例には異同がない。

㊿かぐや姫を見つけたりけん竹取の翁よりも珍しき心地するに、（妹尼の心内）「いかなる物のひまに（この娘〈浮舟〉は）消え失せんとすらむ。」と、しづ心なくぞ思しける。

〈手習、二〇〇三⑪〉

○（妹尼の心内）「（浮舟は）残り多かる御身を、いかで経たまはむとすらむ。…」と、臥しまろびつつ、いといみじげに思ひたまへるに、〈手習、二〇三二⑬〉

52（浮舟の心内）「この世には、ありし御さまを、よそながらだにいつか見んずる。」〈手習、二〇二五⑨〉

○女、（浮舟の心内）「いかで（薫に）見えたてまつらんとすらん。」と、空さへ恥づかしく恐ろしきに、〈浮舟、一八八五⑪〉

異同のないムトスでありながら、話題に卑俗な点が見出されるものは他にもある。次の〈夕霧〉の例では小少将（落葉宮の女房）が男女の事情に通じない夕霧を非難している。[31]〈玉鬘〉の例では、椿市の僧（宿屋の主）が「むつか」りながら発言している。〈手習〉の例では、母尼の声におびえる浮舟の心的動揺が記されている。〈朝顔〉の例では源氏が朝顔に対して恨みごとを述べており、〈空蟬〉の例では源氏が小君に恨みごとを述べている。

源氏が発話者である、〈朝顔〉と〈空蟬〉の用例を見るとき、〈朝顔〉の例は対話の相手が朝顔の姫君であるためにぞんざいな物言いを忌避したのかとは推測できる。しかし、その一方で、〈空蟬〉の例は、対話の相手が小君であるから、ぞんざいな物言いが許容されるのではないか、よって、ムズへの異同があってもよいのではないかと期待されるのであるが、異同はない。

○（小少将）「まだ知らぬは、げに世づかぬ御心がまへのけにこそはと。ことわりは、げに、いづかたにかは、（あなた＝夕霧に）寄る人はべらんとすらむ。」と、少しうち笑ひぬ。

〈夕霧、一三五九⑪〉

○家あるじの法師、「人宿したてまつらむとするところに、なに人のものしたまふぞ。あやしき女どもの、心にまかせて。」と、むつかるを、〈玉鬘、七三二⑤〉

○（母尼）「あやし。これは誰ぞ。」と、執念げなる声にて見おこせたる、さらに、（浮舟の心内）「ただいま、（私を）食ひてむとする。」とぞ思ゆる。〈手習、二〇二四⑧〉

○（源氏）「今は、（あなた＝朝顔は）なにの諫めにか、（私を避けようと）かこたせたまはむとすらむ。」〈朝顔、六四二⑨〉

○（源氏）「さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましう、からうこそあべけれ。」〈空蟬、八八⑭〉

このように、会話文・心内文の、ムズへの異同のないムトスにおいては、発話者や発話の内容には卑俗な点がある場合もない場合もあることから、発話者や発話内容が卑俗なものである場合は必ずムズへの異同があるというわけではないのである。

以上のことから、『物語』の諸写本に見られるムズは、発話者や

動作主に社会的地位の低さや未熟さが見出される場合や、発話の内容や話題に、一般的・日常的・常識的な有りようとは異なった、卑しさや下品さや心的な動揺が見出される場合に異同として現れる場合がある、と言える。つまり、ムズは、当該箇所に記された事態の何らかの点に卑俗的な要素が見出されるところに、異同として現れる傾向があると言い得るのである。

おわりに

以上、『源氏物語』諸写本に見られる推量の助動詞ムズについて考察した。本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

一．助動詞ムズは、『源氏物語』の53箇所の、ムトス（推量の助動詞ム＋格助詞ト＋サ変動詞ス）や、推量・推定の助動詞（ムやベシ）のあるところ、あるいは、推量・推定の助動詞があると想定することのできるところに対して、『源氏物語』諸写本に、異同として見られる。

二．『源氏物語』諸写本における助動詞ムズは、地の文以外のところに集中して見られ、登場人物の話しことばという範囲内で、口頭語の性質があるところに見られる傾向が顕著である。

三．『源氏物語』諸写本における助動詞ムズは、発話者や動作主に社会的地位の低さや未熟さが見出される場合、また、発話の内容や話題に一般的・日常的・常識的なありようとは異なる場合、つまり、卑俗的な要素が見出される場合に、異同として見られる傾向がある。

注

（1）このことについては山口・秋本編（二〇〇一）のムズの項目（秋本守英執筆担当）に詳しい。

（2）渡辺（一九七三）には、『大成』一七二九頁4行目のムトスに異同がある旨が記されているが、『大成』の異同を見る限り、これは誤りのようである。

（3）「ふと心おとりするもの」。『枕草子　紫式部日記』（日本古典文学大系（岩波書店））に拠る。

（4）ムズの項目。秋本守英執筆担当。

（5）注4に同じ。

（6）ムズの項目。吉田金彦執筆担当。

（7）ムズも意味機能や他の推量・推定の助動詞との相違等も課題となるが、それらについては稿を改めて考察することとする。

（8）吉沢（一九五二）は『湖月抄』を底本としている。『湖月抄』は古注釈ではあるが、ムズが衰退したとされる江戸期のものである（此島一九七三に拠る）ものの、出現例があるので、本稿では、参考として、調査結果に含めることとした。

（9）用例の所在確認に使用した資料、ならびに、追加調査を行った資料は、本稿末尾の調査資料の一覧のとおりである。

（10）本稿末尾の調査資料参照。

（11）『大成』や諸写本（注9）の解題等を参照してこれを付した。写本は複数の系統の混種本である場合もあるので、【表1】では一つの写本に複数の系統が混在している場合がある。

（12）桃園文庫本の異同は『大成』を参照し、『大成』で校合本文として採用のない巻については【表1】では「－」を付すこ

ととした。一条兼良奥書本の異同は加藤（二〇〇一）を参照し、欠巻（加藤一九九九に拠る）も、加藤（二〇〇一）で校合本文として不採用の巻も、【表1】では便宜的に「－」を付すこととした。

(13) 写本からは、トが補筆されている事実のみを知ることができるにすぎず、トが一旦は欠落したその理由、補筆した理由、補筆された時期等を知ることはできない。当該箇所に「ムズ」とあった可能性のあることを考慮して、本稿は「と補」もムズの用例として扱うこととした。ただし、これらを考察対象から除外しても、本稿の論旨には影響しない。

(14) 「なんと」の「と」には実際には斜線が付されている。

(15) 注14に同じ。

(16) 注14に同じ。

(17) 中古のムズでは已然形が出現するのは稀で、中世なるとコソの結びや助詞バの前に現れるとされる（此島一九七三）。

(18) これについては五島（一九八〇）も指摘している。

(19) 副助詞ナドには同義のナンドもある。すると、ナントス（副助詞ナンド＋動詞ス）に対してムトスが見出される可能性があるのではないかと考えられるが、『大成』に副助詞ナド＋スは61例ある（ナンドスはない）ものの、ムズへの異同があるのは用例④のみである。

(20) 『源氏物語　三』（日本古典文学大系（岩波書店））二一四頁の傍注に拠る。

(21) 地の文にムズが現れるのは十二世紀頃からであること（吉田一九六二）、『物語』の諸写本の書写年代は鎌倉時代を遡らず、また、『物語』の諸写本には、写本が書写された当時の語法の影響を受ける場合のあること（竹部二〇一五・二〇一六・二〇一八b・二〇一九a）などを考え合わせると、地の文にムズが現れるのは書写当時の書写者の言語意識の反映である可能性も一因としてはあるのではないかと考える。

(22) 『源氏物語』においては、語り手の問題は不可避ではあるが、本稿はそれについて論ずることを目的とはしていないため、「書き手」としておく。

(23) 注4に同じ。

(24) ムズへの異同は男性に多く、異同のないムトスは女性に多いと見ることもできそうであるが、この点についての検討は改めて行うこととしたい。

(25) 竹部（二〇〇九）。

(26) 【表3】のとおり、地の文におけるムズへの異同は、用例④・⑨と、次の用例⑯の3例がある。用例⑯は、この前後において、明石の上が自分自身の身分の低さを嘆く様子が描かれているので、それに因って明石の上の社会的地位の低さが見出されているものと推測する。

⑯（明石の上の心内）「（源氏は）今や京におはし着くらむ。」と思ふ日数も経ず、（明石に）御使ひあり。このころのほどに（源氏が明石の上を都に）迎へむことをぞのたまへる。〈澪標、五〇四①〉

・このほとにむかへんすることをその給ひける

〈鶴見大学蔵本（未確認）〉

(27) 『源氏物語　四』（日本古典文学大系（岩波書店））二八〇頁

の頭注に「うるさい意見もあり、玉鬘が困惑する」とある。

(28) 傍線部には解釈が二通りあるとされる。源氏が協力的でないことに対し、兵部卿がどのように対処するか、あるいは、源氏がどのように対処するつもりかという二つである。いずれに従っても、書き手が批判的見解を示していると解釈できる。

(29) 玉上琢也（一九六五）『源氏物語評釈　第三巻』二六二頁。

(30) 玉上琢也（一九六五）『源氏物語評釈　第二巻』三九一頁。

(31) 『源氏物語　四』（日本古典文学大系（岩波書店））の頭注に拠る。

参考文献

浅川哲也・竹部歩美（二〇一四）『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう

池田亀鑑編著（一九五三―一九五六）『源氏物語大成』中央公論社

上田英代ほか共編（一九九四）『源氏物語語彙用例総索引』勉誠社

加藤洋介（一九九九）「了俊・兼良の源氏物語―書陵部蔵源氏物語をめぐって―」『説林』四七

――――（二〇〇一）『河内本源氏物語校異集成』風間書房

鎌倉暄子（一九九三）「いわゆる推量の助動詞ムズ・ムズルとムトスーその本質と成立に関連して―」鶴久教授退官記念論文集刊行会編『鶴久教授退官記念国語学論集』桜楓社

北山谿太（一九五七）『源氏物語辞典』平凡社

源氏物語別本集成刊行会（一九八八―二〇〇二）『源氏物語別本集成』桜楓社

源氏物語別本集成刊行会（二〇〇五―二〇一〇）『源氏物語別本集成続』おうふう

此島正年（一九七三）『国語助動詞の研究　体系と歴史』桜楓社

五島和代（一九八〇）「源氏物語のムズ」『北九州大学文学部紀要』二六

関一雄（一九九〇）「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」（一）」『山口大学文学会志』四一（関一雄（一九九三）『平安時代和文語の研究』（笠間書院）所収）

――――（一九九一）「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」（二）」『山口国文』一四（関一雄（一九九三）『平安時代和文語の研究』（笠間書院）所収）

高山善行（二〇一六）「第4章　推量・様態・伝聞の助動詞」中山緑朗・飯田晴巳編『品詞別学校文法講座　第六巻　助動詞』明治書院

竹部歩美（二〇〇九）「源氏物語における「むすめ」「をんなご」について」『国語研究』七二

――――（二〇一五）「国宝『源氏物語絵巻』詞書の仮名表記について―読解上の問題点と変体仮名の運用―」『言語の研究』一

――――（二〇一六）「国宝『源氏物語絵巻』詞書の語法小考―『源氏物語』との比較から―」『国語研究』七九

――――（二〇一八a）「国冬本『源氏物語』の「柏木」と「鈴虫」の変体仮名の運用」『国際関係・比較文化研究』一六―二

――――（二〇一八b）「国冬本『源氏物語』に見られる使役と尊敬のサス―サ変動詞ス＋助動詞サスに相当するサスについて」『言語の研究』四

――――（二〇一九a）「伝西行筆『源氏物語』竹河に見られる語

法小考」『国語研究』八二
――――（二〇一九b）「二つの伝西行筆『源氏物語』竹河の仮名表記」『国際関係・比較文化研究』一七―二
田島毓堂編（一九九四）『源氏物語絵巻詞書総索引』汲古書院
築島裕（一九七四）「国語史上の源氏物語」阿部秋生編『源氏物語の研究』東京大学出版会
松村明編（一九六九）『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
――――（一九七一）『日本文法大辞典』明治書院
森野宗明（一九五七）「枕草子における「むず」（むとす）をめぐって」『未定稿』四
山口明穂・秋本守英編（二〇〇一）『日本語文法大辞典』明治書院
吉沢義則（一九五二）『対校源氏物語新釈』平凡社
吉田金彦（一九六二）「中古・近古における推量語「むず」・「むとす」の用法」『国語と国文学』三九―三
渡辺仁作（一九七三）『河内本源氏物語語彙の研究』教育出版センター

調査資料

以下、筆頭には【表1】縦軸に示した写本の仮称を記してある。

飯島…飯島本（書芸文化院春敬記念書道文庫蔵、『飯島本源氏物語』笠間書院）
池田…池田本（天理図書館蔵、新天理図書館善本叢書『源氏物語池田本』八木書店）
大島…大島本（古代学協会蔵）
御物…御物本（東山御文庫蔵本各筆源氏、『御物　各筆源氏』貴重本刊行会）
宮内庁為家…宮内庁為家本〔東屋〕（宮内庁書陵部マイクロ収集資料五〇三―三六、伝二条為定写一冊。国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース）（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100190265/viewer/9）
国冬…伊藤鉄也・岡嶌偉久子（一九九六）「国冬本源氏物語1（翻刻　桐壺・帚木・空蟬）伊井春樹編『本文研究　第一集』和泉書院。同（一九九八）「国冬本源氏物語2（翻刻　夕顔・若紫・末摘花）伊井春樹編『本文研究　第二集』和泉書院、同（二〇〇〇）「国冬本源氏物語3（翻刻　紅葉賀・花宴・葵）伊井春樹編『本文研究　第三集』和泉書院、同（二〇〇一）「国冬本源氏物語4（翻刻　賢木・花散里・須磨・明石）伊井春樹編『本文研究　第四集』和泉書院、同（二〇〇二）「国冬本源氏物語5（翻刻　澪標・蓬生・関屋・絵合・松風・薄雲）伊井春樹編『本文研究　第四集』和泉書院、同（二〇〇四）「国冬本源氏物語6（翻刻　朝顔・少女・玉鬘・初音・胡蝶）伊井春樹編『本文研究　第四集』和泉書院
湖月抄（対校）…吉沢義則（一九五二）『対校源氏物語新釈一～別冊二』平凡社
榊原…榊原家本（国文学研究資料館蔵、『源氏物語　榊原本』勉誠出版）
三条西（宮内庁）…三条西家本（宮内庁書陵部蔵、原色版青表紙本『源氏物語』新典社）
三条西（日大）…三条西家本（日本大学蔵、『日本大学蔵　源氏物語』八木書店）

角屋…角屋本〔末摘花〕（角屋保存会蔵源氏物語末摘花巻、加藤洋介（二〇〇九）「角屋保存会蔵　源氏物語末摘花巻―解題と影印・翻刻―」『角屋研究』一八）

静嘉堂為氏…伝二条為氏筆〔手習〕（静嘉堂文庫蔵源氏物語手習巻、財団法人静嘉堂編（一九八〇）『物語文学書集成第二編（マイクロフィルム）』雄松堂書店）

尊経閣12帖為家…伝二条為家筆〔十二帖（桐壺・蓬生・松風・朝顔・常夏・篝火・真木柱・鈴虫・御法・匂宮・紅梅・橋姫）〕（尊経閣文庫３４３―２、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１０５７８）

尊経閣伝為氏…伝二条為氏筆〔一帖（椎本）〕（尊経閣文庫３４３―３、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１０５７９）

尊経閣６帖慈寛…尊経閣文庫六帖〔総角（伝津守国冬筆）・東屋・浮舟・手習・夢浮橋（伝慈寛筆）〕（尊経閣文庫３４３―５、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１０５８１）

尊経閣言経…山科言経筆本（尊経閣文庫蔵３４３―６、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１０５８２）

高松宮…高松宮家蔵本（『高松宮御蔵河内本源氏物語』臨川書店）

伝為相…伝為相筆〔真木柱〕、天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集　二』八木書店）

中京大河内…大島河内本（中京大学図書館蔵・貴９、国文学研究資料館マイクロ請求記号２９９―３―１）

天理大伝西行…伝西行筆〔竹河〕（天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集　二』八木書店）

天理大長谷場旧蔵…長谷場純敬旧蔵本〔真木柱〕（天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集　二』八木書店）

中山…中山家旧蔵本（国立歴史民俗博物館蔵、『貴重典籍叢書　文学篇十七』臨川書店）

ハーバード…ハーバード大学蔵本（『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」』新典社・『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「蜻蛉」』新典社）

尾州…尾州家本（蓬左文庫所蔵・尾州家旧蔵、『尾州家河内本源氏物語』八木書店）

伏見…伏見天皇本（古典文庫）

蓬左文庫実時…蓬左文庫蔵北条実時本奥書本（蓬左文庫蔵１６４―８、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１５９９）

保坂…保坂本（東京国立博物館蔵、『保坂本源氏物語』おうふう）

穂久邇…穂久邇文庫蔵本（日本古典文学影印叢刊『源氏物語』貴重本刊行会）

陽明…陽明文庫本（陽明叢書『源氏物語』思文閣出版）

歴博…高松宮家禁裏本（源氏物語帚木・源氏物語手習、国立歴史民俗博物館蔵、『貴重典籍叢書　文学篇十八』（臨川書店）

以下は調査したがムズへの異同の見られなかったものである。

阿仏尼本（東洋大学附属図書館蔵『阿仏尼本　はゝき木』勉誠出版）

今川了俊筆空蝉巻（専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊）専修大学出版局

伝越部局筆〔松風〕（蓬左文庫蔵１０８―６６、国文学研究資

料館紙焼写真請求記号Ｅ１４４１）
『日本大学蔵　源氏物語　鎌倉期諸本集　一』八木書店
『日本大学蔵　源氏物語　鎌倉期諸本集　二』八木書店
伝二条為氏筆〔竹河〕蓬左文庫蔵１０８―６４、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１４４２
伝藤原為家筆〔帚木〕（天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集一』八木書店）
伝藤原為家筆〔浮舟〕（蓬左文庫蔵１０８―６３、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１４４３）
天理大学蔵〔夕霧〕（天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集　二』八木書店）
蓬左文庫蔵本（蓬左文庫蔵所蔵鎌倉時代古鈔本、『源氏物語古本集』貴重本刊行会）
蓬左文庫蔵〔総角〕（蓬左文庫蔵１０８―６５、国文学研究資料館紙焼写真請求記号Ｅ１４４０）
伝明融等筆本（東海大学附属図書館蔵、東海大学蔵桃園文庫影印叢書『源氏物語』東海大学出版会）
伝冷泉為相筆〔末摘花〕（天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集　一』八木書店）

14	(15)	(16)	(17)	18	19	(20)	21	(22)	23	24	25	26	27
澪標	澪標	澪標	松風	薄雲	玉鬘	玉鬘	常夏	真木柱	真木柱	真木柱	若菜上	若菜上	若菜上
483 ⑭	499 ⑥	504 ①	584 ②	623 ⑪	729 ⑭	744 ⑨	846 ③	946 ⑩	954 ⑭	966 ⑦	1026 ②	1027 ⑩	1098 ②
ムトス	ムトス	ム	ムトス	ムトス	ムトス	心ツクサスル	ムズ	ムトス	ムトス	ム	ムトス	～ズモヤト	スギハテヌル
会話	草子	地	心内	心内	心内	会話	会話	心内	心内	手紙	心内	草子	心内
							別		別			別	別
							別		別				
							青						
					—	—	—						
								河					
							青						
											青		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
							青						
							青						
							—				—	—	
青							青						
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—		—	—	—	青				—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
							別						
—	—	—	—	—	—	—	—		別	別	—	—	—
別	別	別	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
												河	河
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—		別	別	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
							青						
—	—	—									河		
				青		別							
							青						
							別		別と補		—	—	—
			青		別		別		別				
							青						
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

【表１　諸写本に見られるムズ】（前半）

連番	(1)	2	3	(4)	5	(6)	7	(8)	9	(10)	11	(12)	13
大成	帚木	夕顔	夕顔	夕顔	若紫	若紫	末摘花	葵	葵	葵	賢木	須磨	須磨
	58 ⑨	135 ④	140 ⑪	141 ⑫	157 ⑪	158 ③	230 ⑦	290 ⑪	292 ⑨	314 ⑨	377 ④	412 ⑥	434 ⑤
大成本文	ム	ベシ	ムズ	ナドス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ム	ノタマハスル	ムトス	ムトス	対面ハト申シタマフ
位置	会話	会話	会話	地	会話	和歌	会話	会話	地	手紙	心内	会話	会話
阿里莫											別		
飯島			河		別						河		
池田													
一条兼良奥書	—		河	河	—	—	—				河		
岩国吉川家			河								河		
大島			青				青と補						
御物	別						別	別	別	別			別
宮内庁為氏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
国冬				別									
湖月抄（対校）													
榊原	—				—	—	—					—	—
三条西（宮内庁）												別と補	
三条西（日大）					青と補								
七毫		河	河		河						河		
肖柏													
角屋	—	—	—	—	—	—	別	—	—	—	—	—	—
静嘉堂為氏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尊経閣・12帖伝為家	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尊経閣伝為氏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尊経閣・６帖慈寛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尊経閣言経					—	—							
高松宮		河	河	河	河						河		
伝為相	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鶴見大	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
中京大河内		河	河	河	河						河		
天理大河内		河	河	河							河		
天理大伝西行	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天理大長谷場旧蔵	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
桃園	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
中山	—	—	—	—	別		—	—	—	—	—	—	—
ハーバード	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
尾州		河	河	河と見消	河						河		
平瀬											河		
伏見													
蓬左文庫実時		河	河	河と見消	河						河		
鳳来寺		河	河		河						—		
保坂													
穂久邇			青	青			青					別	
麦生	—						—				—		
陽明					別	別	別						
横山							青と補						
歴博		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

41	42	(43)	44	45	46	47	48	49	(50)	51	52	53
東屋	浮舟	浮舟	浮舟	浮舟	浮舟	蜻蛉	蜻蛉	手習	手習	手習	手習	夢浮橋
1850 ⑨	1863 ①	1874 ⑭	1880 ⑪	1882 ⑥	1919 ⑤	1966 ④	1970 ⑪	1993 ⑪	2003 ⑪	2019 ⑬	2025 ⑨	2070 ④
ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ム	ムトス	ムトス	ムトス	ムズ	ムトス
心内	会話	会話	会話	心内	心内	心内	会話	会話	心内	会話	心内	会話
別										別	別	
	河					—	—					—
									河			
	—	—	—	—	—						青	
	河		河									
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	別			別				別		別	別	
			青			—	—	青			青	
											青	
											青 とイ	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—				青	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
						—	—			河		
			別 と補					別 と補			別 と補	
	河			河				河		河	河	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	河					河	河					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—				別		—	—				別	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	別		—	—	—	—	—
		青	青									
			河 と補									
	—	—	—	—	—	別						別
											青	
—			別					—	—	—	—	
	別 と見消				別							
—								—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—			別		—

【表１　諸写本に見られるムズ】（後半）

連番	(28)	29	(30)	31	32	33	34	35	36	37	(38)	39	40
大成	夕霧 1341 ⑥	夕霧 1363 ⑬	幻 1404 ⑩	竹河 1488 ⑧	椎本 1570 ③	椎本 1571 ⑨	総角 1660 ⑤	総角 1660 ⑨	宿木 1713 ⑥	宿木 1734 ⑧	東屋 1799 ⑪	東屋 1826 ⑦	東屋 1849 ⑬
大成本文	ベシ	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ムトス	ム	ムトス	ム	ムトス	ムトス
位置	会話	会話	心内	会話	会話	会話	心内	会話	会話	心内	会話	心内	心内
阿里莫									別				
飯島													
池田													
一条兼良奥書	—	—	—				—	—	—	—			
岩国吉川家													
大島													
御物					河								
宮内庁為氏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			別
国冬	別												別
湖月抄 （対校）										○			
榊原	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
三条西 （宮内庁）			青 と補										青
三条西 （日大）	—	—											青
七毫		河										河	
肖柏								青					
角屋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
静嘉堂 為氏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尊経閣・12帖 伝為家	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尊経閣 伝為氏	—	—	—	—	青		—	—	—	—	—	—	—
尊経閣・６帖 慈寛	—	—	—	—	—	—			—	—			
尊経閣 言経													
高松宮													河
伝為相	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鶴見大	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
中京大 河内													
天理大 河内													
天理大 伝西行	—	—	—	別	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天理大 長谷場旧蔵	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
桃園	—	—	—	—	—	—	—	—		別	—	—	—
中山	—	—	—	—	—	—			—	—	—	—	—
ハーバード	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
尾州													
平瀬				—			別						
伏見					青						河		
蓬左文庫 実時													
鳳来寺													
保坂													
穂久邇							青						
麦生							—	—	—	—	—	—	—
陽明						別							別
横山							青		—		—	—	—
歴博	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

謝辞

資料の翻刻の掲載を御許可くださった中京大学名古屋図書館に記して感謝申しあげる。また、本稿をなすにあたり本誌査読委員の方々から多くの御教示を賜った。記して御礼申しあげる。

付記

本稿は平成二八年度科学研究費補助金学術研究助成基金助成金（基盤研究C）による研究課題「『源氏物語』写本との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的研究」（課題番号16K02731）の研究成果の一部である。

（たけべ・あゆみ　静岡県立大学）